“Little Annie’s Ramble”

― 手廻しオルガン弾きに注目して ―

A Study on “Little Annie’s Ramble”:
What Do We Notice When We Put a Spotlight on the Organ Grinder?

井　上　久　夫 *

Abstract

“Little Annie’s Ramble” by Nathaniel Hawthorne was published in *Youth’s Keepsake* in 1835. The sketch was popular among people and in the mid–nineteenth century was esteemed as being on a par with the short tales, “The Gentle Boy” (1832), “My Kinsman, Major Molineux” (1832), “Roger Malvin’s Burial” (1832), “Young Goodman Brown” (1835), “Wakefield” (1835), “The Maypole of Merrymount” (1836), and “The Minister’s Black Veil” (1836).

Since the late–nineteenth century, however, “Little Annie’s Ramble” has gradually decreased in popularity and estimation, and the sketch has vanished from well–known anthologies. The main reason is that readers have become interested in ‘dark’ themes, such as sin, solitude or neglect, rather than those of ‘light’, such as innocence and childhood purity.

However, when we consider that Hawthorne’s works include ‘ambiguity’, something well known among Hawthornians, we need to reconfirm whether or not the sketch includes the ‘dark’. Putting the spotlight on the ‘street musician’ who appears in the sketch and exploring the reason why Hawthorne used not only the term ‘street musician’ but also ‘organ grinder’, we notice that the sketch includes the ‘dark’.

The aim of this paper is to show that “Little Annie’s Ramble” includes not only the ‘light’ but also the ‘dark’, through comparing the sketch with “Der Leiermann”, the last song of the cycle songs *Die Winterreise* (*Winter Journey*) by Wilhelm Müller (poet) and Franz Schubert (composer).

キーワード：ホーソーン、「アニーちゃんのお散歩」、手廻しオルガン弾き、シューベルトの『冬の旅』

はじめに

“Little Annie’s Ramble” は、1834 年に *Youth’s Keepsake*（dated 1835）に掲載されたスケッチである。著者 Nathaniel Hawthorne は数多くのスケッチを残しているが、その題材のほとんどは特別なものではなく、日常的なものである。言い換えれば、「歴史的建造物、著名人、すぐれた功績」といったものではなく、「Salem の日常の一コマ」（Tassel 169）なのである。登場するのは、幼い Annie、彼女と一緒に散歩に出かけるナレーター、町の触れ役（town crier）、手廻しオルガン弾き（organ grinder）、お菓子屋、本屋、おもちゃ屋、店先の小鳥や犬や猫、檻に入っているサーカスの動物といったものに限られている。確かにこのスケッチには、ちょっとした「日常の一コマ」が描かれているだけなのである。

とはいえ、この作品は「19世紀においては、皆がすぐに “Little Annie’s Ramble” の虜になってしまった」（Miller 118）といわれるほど人気があり、高い評価を得ていた。[1)]

ところが、「20世紀の読者たちには、この短いお話は、ほろりとさせてくれるが平凡でつまらないと見做され、あっという間に忘れ去られてしまったのである。」（Miller 118）

ではなぜ、「ホーソーンの時代に高く評価された作品が、20世紀において、大いに無視される」

* Hisao INOUE　教育学部教授

（Tassel 168）結果となってしまったのであろうか。その理由として、この作品とほぼ同年代に出版されたHawthorneの短篇への関心が高まったことを挙げることができる。20世紀に入ってから、より高い評価を受けるようになった作品、たとえば、“The Gentle Boy”（dated 1832）、“My Kinsman、Major Molineux”（dated 1832）、“Roger Malvin's Burial”（dated 1832）、“Young Goodman Brown”（1835）、“Wakefield”（1835）、“The Maypole of Merrymount”（dated 1836）、“The Minister's Black Veil”（dated 1836）が、アンソロジー、研究書、論文で取り上げられている数と“Little Annie's Ramble”の数の違いを比較すれば、いかにそれらの短篇に興味が移っていったかを窺い知ることができよう。[2)]

これらの短篇に含まれているテーマ、それは「罪」や「孤独」や「疎外感」である。多くの読者、特に研究者は、ホーソーンの作品が持つ、いわゆる、「暗さ」に関心の眼を向けるようになってきたのである。したがって、その当然の結果として、「明るさ」と「子ども時代の純粋性」（“childhood purity”）（David Reynolds 114）とが顕著に表れている“Little Annie's Ramble”への関心が薄れていったことは頷けよう。

しかしながら、ホーソーンの作品の特質の一つである“ambiguity”（曖昧性・多義性）を考慮に入れると、「平凡でつまらない」と思われている“Little Annie's Ramble”も、もしかすれば、その「明るさ」「子ども時代の純粋性」の背後に、同時代の短篇と同様の「暗さ」が隠されているかもしれない、と疑ってみたくなるのである。20世紀において、また、21世紀に入った現在でもそうであるが、取り上げられたにせよ、僅かに触れられる程度の“Little Annie's Ramble”を詳細に読み、見落とされてきた可能性のある「暗さ」を探ろうとする試みは、あながち意味なきことではなかろう。

それでは、*The Marble Faun*に登場するHildaの次のことばに耳を傾けながら、「明るさ」の背後に隠されているかもしれない「暗さ」を求めて、散歩に出かけることにする。

「詩人や芸術家が実際に表した以上のものをその作品の中に読み取ることができないような人は、詩を読んだり、絵や彫刻を見たりすべきではないのよ。作者の最大の長所は豊な暗示性にあるのですもの」[3)]

I

はじめに、“Little Annie's Ramble”の粗筋を紹介しておく。

“Ding-dong! Ding-dong! Ding-dong!”という鐘の音が鳴り、サーカスが町にやってきたことが知らされる。ナレーターとAnnieは通りの角を曲がってサーカス会場へ向かおうとする。角を曲がった後、町の喧噪の中を、いろいろな人たちとすれちがい、店を覗き、小鳥や小動物を見、やがてサーカス会場近くまでやってくる。そして檻に入っている動物たちを眺める。そうこうしているうちに、再び町の触れ役が“Ding-dong! Ding-dong! Ding-dong!”という鐘の音を鳴らしながら、小さな女の子がいなくなったので、誰か心当たりはないか、と呼びかけている声を耳にする。ナレーターは、Annieといっしょに出かけることを彼女の母親に知らせていなかったことを思い出して、すぐに一緒に家へ戻ろうとする。その後は、ナレーターが、Annieのような小さな子どもと一緒に散歩をすると、失われていた子ども時代の感性を一時は取り戻せるようになり、以前より心は優しく、純粋になり、また、精神は以前よりも明るい賢明さに満たされて、群衆の中へと戻っていくことができるのだ、と述べて、スケッチは閉じられる。

以上の粗筋からも分かるように、このスケッチは、子どもに備わっている特性と感性を思い出させ、その不思議な力を読者に再認識させてくれる作品である。と同時に、明るく、楽しい気持ちにさせてくれる作品である。だが、そのような思いにさせてくれるのはAnnieではなく、ナレーターである。Annieがことばを発することは一度もない。最後まで、彼女の気持ちや振る舞いは、ナレーターを通して伝えられるのである。そのことを考えると、この作品に登場する人物のなかでもっとも重要な人物はナレーターであり、その人物像を探ることは、作品を味わう上で不可欠であることが分かる。

彼がどの類のナレーターなのかを判断するために、次の引用文を詳しく見ることからはじめる。

Perhaps little Annie would like to go. Yes; and I can see that the pretty child is weary of this wide and pleasant street, with the green trees flinging

their shade across the quiet sunshine, and the pavements and the sidewalks all as clean as if the housemaid had just swept them with her broom. She feels that impulse to strolling away—that longing after the mystery of the great world—which many children feel, and which I felt in my childhood, Little Annie shall take a ramble with me. See! I do but hold out my hand, and, like some bright bird in the sunny air, with her blue silk frock fluttering upwards from her white pantalettes, she comes bounding on tiptoe across the street. (CE IX 121)[4)]

ホーソーンは、最初に、"perhaps" を用いることによって、Annie が散歩に出かけることを望んでいるかどうかに、少々不安を覚えているナレーターの姿を示している。そして、第二文で、"Yes"を用いることにより、その不安を打ち消そうとし、さらに、"can see" によって、Annie がこのきれいな街路地で遊ぶことに飽きている可能性が高い、と自らに言い聞かせようとしているナレーターの姿を示している。さらに続けて、"She feels that impulse to strolling away which many children feel." という一文を加えることで、Annie の衝動は多くの子どもたちのそれと同じだということ、また、"which I felt in my childhood" を付け加えることで、その衝動は大人であるナレーター自身も感じていたものであり、過去から現在までの多くの子どもに当てはまるのだということを強調し、Annie が散歩に出かけたがっていることを確信しようとするナレーターの姿を示している。

ナレーターは、Annie が散歩を望んでいることを確信するために、五つもの段階を踏んでいる。ことばを換えれば、5回も自らに言い聞かせないと確信できないのである。この一例からだけでも、彼は「全知のナレーター」ではなく、「一人称のナレーター」であることが分かる。それとともに、繊細かつ慎重な人物であることが分かる。

さらに詳しくナレーターを追ってみる。

What a strange couple to go their rambles together! One walks in black attire, with a measured step, and a heavy brow, and his thoughtful eyes bent down, while the gay little girl trips lightly along, as if she were forced to keep hold of my hand, lest her feet should dance away from the earth. Yet there is sympathy between us. If I pride myself on anything, it is because I have a smile that children love; and, on the other hand, there are few grown ladies that could entice me from the side of little Annie; for I delight to let my mind go hand in hand with the mind of a sinless child. (CE IX 121-122)

先ほど、ナレーターは、「全知のナレーター」ではなく「一人称のナレーター」である、と述べたが、そのナレーターが、この箇所では、"One walks in black attire, with a measured step, and a heavy brow, and his thoughtful eyes bent down, while the gay little girl trips lightly along" のように、"I" ではなく "one" を用いている。それは、ここで示されているナレーターの服装や風貌は、決して、「一人称のナレーター」の主観によるのではなく、客観によるのだということを強調するためである。このナレーターは、ホーソーンのように、「自分自身の姿を、第三者的な眼で眺める心の習癖」(林 257) も持っているのである。

以上の点から、このナレーターを「一人称のナレーター」であると見做すことに問題はなかろう。このことを大前提として、彼の人物像を探ることにする。

ナレーターは、自分と Annie を比較して、自分はゆっくりした足取りで歩き、しかめ面をしていて、物事を深く考えるまなざしを持った大人、一方 Annie は軽快な足取りで歩き、僕の手を離すと飛んでいってしまいそうなお茶目な女の子で (國重 273)[5)]、二人は好対照な組み合わせである、と述べている。そして、好対照であるにもかかわらず、二人には相通じるものがあるのだ、と言っている。"sympathy" が強調されているのである。その後、続けて、自分に誇れるものがあるとすれば、それは子どもたちが大好きな "smile" をもっていること、また、Annie 以上に自分を惹きつける大人の女性はほとんどいないこと、さらに、Annie のような "sinless child" と心と心を通わせるほうがより楽しいのだ、と自身の特徴を語っている。

これらをまとめると、ナレーターの人物像は、ゆっくりとした足取りで歩き、しかめ面をし、「物

事を深く考えるまなざし」を持ち、と同時に、Annie や Annie 以外の子ども達とも「心を通わすこと」ができ、子どもたちが大好きな「笑み」を持ち、子どもを「無垢」と感じている独身男性ということになる。

ところで、今述べた「子どもを無垢と感じているナレーター」ということについてここで確認しておきたい。ホーソーンが聖書を詳しく読んでいたことはよく知られている[6)]。したがって彼が聖書の子ども観を知っていたということに疑問を挟む余地はなかろう。

聖書には、大きく二種類の子ども観がある。一つは、「無垢」であることを「積極的」、「肯定的」に捉えようとするもの。もう一つは、「消極的」、「否定的」に捉えようとするものである。前者の例としては、マタイによる福音書11章25節、18章2-3節、マルコによる福音書10章15節で述べられているイエス・キリストのことばを挙げることができる。[7)]

「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。」

イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真中に立たせて、言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くするものが、天の御国で一番偉い人です。」

「まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」

一方、後者の例としては、箴言22章13節、23章13節を挙げることができる。

愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る。

子どもを懲らすことを差し控えてはならない。むちで打っても、彼は死ぬことはない。あなたがむちで彼を打つなら、彼のいのちをよみから救うことができる。

“Little Annie’s Ramble” では、明らかに前者の見方が全面に出ている。“sinless child”（「無垢なこども」）と表現されていることからそのことが明らかである。「人は罪を持って生まれてくる」とする原罪説を土台とした見方とは逆の捉え方なのである。

誤解があってはいけないので述べておくが、決して、“sinless child” はホーソーンの子ども観ではない。“The Artist of the Beautiful” に登場する Peter Hovenden の孫である赤ん坊や *The Scarlet Letter* に登場する Pearl を Annie と比較すれば、そのことは明らかである。あくまで、一人称のナレーターが持っている子ども観である。ナレーターは、旧約聖書の箴言におけるソロモン的まなざしではなく、新約聖書の福音書におけるイエス・キリスト的まなざしで、Annie を見ているのである。

さて、この作品の登場人物のなかで最も重要と見做されるナレーターの人物像が定まったところで、次にこの作品で最も気になる人物について述べることにする。その人物とは、手廻しオルガン弾きである。街の誰もが無視したにもかかわらず、Annie とナレーターだけは関心を寄せた人物のことである。一体、Annie とナレーターは、彼の何に、また、なぜ関心を示したのだろうか。まず、二人が彼に出会った場面を見ておくことにする。

Ⅱ

通りの角を曲がったあと、ナレーターと Annie は、二頭立ての貸し馬車、四頭立ての駅馬車、運搬車、手押し車、そして大勢の大人たちに出会う。やがて、教会の石段に腰を下ろして音楽を奏でている手廻しオルガン弾きに関心を寄せる。

Now her eyes brighten with pleasure! A street musician has seated himself on the steps of yonder church, and pours forth his strains to the busy town, a melody that has gone astray among the tramp of footsteps, the buzz of voices, and the war of passing wheels. Who heeds the poor organ grinder? None but myself and little Annie, whose feet begin to move in unison with the lively tune, as if she were loth that music should be wasted without a dance. But where would Annie find a partner? . . . . , but many, many have leaden feet, because their hearts are far heavier than lead. It is

a sad thought that I have chanced upon. What a company of dancers should we be! For I, too, am a gentleman of sober footsteps, and therefore, little Annie, let us walk sedately on. (CE IX 122-23)

この場面では、まず、手廻しオルガン弾きの奏でる音が聞えたとき、Annie の眼が喜びの表情に変化したことが示され、ここに来るまでに出会った人や物や状況に対する彼女の反応、表情とはまったく異なったものであることが伝えられる。次に、彼の奏でる調べが、町の喧騒に妨げられている様子が伝えられる。それから、大衆は彼に対して無関心であることが伝えられ、その後、自分と Annie 二人だけが彼に関心を抱いていること、また、彼が弾く陽気な音楽にぴたりと合わせて Annie が踊り始めている様子が伝えられる。そして最後に、街の多くの人たちは、彼らの心と同じように足取りまで重くなっているので、Annie と一緒に踊れる人はいないし、傍にいる自分はといえば、軽快なステップを踏むことができない類の人間なので、ダンスのお相手を務めることは無理だ、だから、残念だけど、ここに長居はできないんだよ、と言い訳をして先へ進もうとする様子が伝えられる。

以上のことから、Annie の関心は聞えてくる「音」にあることが分かる。手廻しオルガン弾きの奏でる音が聞えたときに、Annie の眼の輝きが突然変化し、踊り始めたからである。と同時に、彼の笑顔にも関心があったことが分かる。踊りたくなるような音楽は、笑顔で演奏するのが自然であろう。Annie は、彼の奏でる「音」と「笑顔」に関心を持ったといってよかろう。一方、ナレーターの関心は彼の「心情」にあることが分かる。誰一人注意を払うことなく、彼の傍らを通り過ぎていく状況を見て、彼の心の内を察し、"poor" ということばを発しているからである。Annie が耳で聞くことのできるもの、眼で見ることができるもの、すなわち、表に出ている「明るさ」に関心を示したのに対して、ナレーターは聞えないもの、見えないもの、すなわち、彼の心の内にある「暗さ」、すなわち、「疎外感」「孤独感」に関心を寄せたのである。

さて、この場面における Annie と手廻しオルガン弾きとの関係については、彼が奏でる陽気な音楽と笑顔という表に出ているものに Annie が素直に反応した、という点を読み取ればこと足りるであろう。5 歳の Annie には、音と笑顔の背後に隠されている「疎外感」「孤独感」に関心を寄せる人物としての役割は与えられてはいない。その役割は、ナレーターに与えられているのである。

では、ナレーターは手廻しオルガン引きの「疎外感」「孤独感」をどの程度まで、どの深さまで読み取っているのだろうか。いや、感じ取っているのだろうか。

ところで、ナレーターは、この場面の最初に "street musician" ということばを、次に "organ grinder" ということばを用いている。「物事を深く考える」タイプのナレーターが、二度目に "organ grinder" ということばを用いている以上、必ず、"street musician" ということばだけでは見えてこない何かをこの "organ grinder" ということばに託しているに違いない。言い換えれば、このことばには、何かが隠されているに違いない。

この "organ grinder" ということばを糸口にして、ナレーターが手廻しオルガン弾きの「疎外感」「孤独感」をどの深さまで感じ取っていたのかを探ることにする。

Ⅲ

"Little Annie's Ramble" が執筆された1834年には、すでに、*Die Winterreise* (*Winter Journey*)『冬の旅』(1828 dated) は世に出ていた。Wilhelm Müller (1794-1827) の詩集「冬の旅」24篇にシューベルトが曲を付けた連作歌曲集である。この連作歌曲集の終曲に "Der Leiermann" すなわち "Organ Grinder" (「手廻しオルガン弾き」) という題名の曲がある。

Der Leiermann[8)]

Drüben hinterm Dorfe/ Steht ein Leiermann,
Und mit starren Fingern/ Dreht er, was er kann.

Barfuß auf dem Eise/ Wankt er hin und her;
Und sein kleiner Teller/ Bleibt ihm immer leer.

Keiner mag ihn hören, Keiner sieht ihn an;
Und die Hunde knurren/ Um den alten Mann.

Und er läßt es gehen/ Alles, wie es will,
Dreht, und seine Leier/ Steht ihm nimmer still.

Wunderlicher Alter, Soll ich mit dir gehn?
Willst zu meinen Liedern/ Deine Leier drehn?

＜日本語訳＞[9)]
村はずれに　手廻しオルガン弾きが立っている。
かじかんだ指で　一心に把手（とって）を廻している。

はだしのまま氷の上を　よたよたと歩いている
手廻しオルガン弾きの小さな皿は　いつまでも空のままだ。

その曲を聞こうとする人も　姿を見ようとする人もいない。
そしてその老人の周りでは　犬どもが吠えたてている。

それでも老人はすべてを　なりゆきに任せたまま、
手廻しオルガンの把手（とって）を廻し続けて、
その音のやむことはない。

風変わりな手廻しオルガン弾きの老人よ、
あなたと一緒に歩いてもいいですか。
わたしの歌の調べに合わせて
その手廻しオルガンを奏でて貰えますか。

ここで、“Little Annie's Ramble” に登場する手廻しオルガン弾きと “Der Leiermann” に登場する手廻しオルガン弾きを対比させてみたい。（これ以降、“Little Annie's Ramble” の手廻しオルガン弾きを ‘OG’、“Der Leierman” の手廻しオルガン弾きを ‘LM’、と表記する。）

“Little Annie's Ramble” では、明るい日差し、サーカス、大勢の人々、忙しく街路地を歩いている商売人、といったことばによって、昼の喧騒の中で演奏している OG の姿が、一方、“Der Leierman” では、冬の黄昏時、氷、まばらな人通り、吠え立てる犬、といったことばによって、夕暮れ時の人通りが少なくなった寒々とした情景のなかでオルガンを奏でている LM の姿が示される。二人を取り巻く周囲の状況は好対照である。

しかし、類似点も見出すことができる。一点目は、彼らの音楽を妨げるものがあるという点、二点目は、彼らは笑顔で演奏していると思われる点、そして、三点目は、彼らに共感を覚えている人がいるという点、である。

一点目についてだが、“Little Annie's Ramble” では街の喧騒が、“Der Leiermann” では犬の吼え声が手廻しオルガン弾きの奏でる調べを妨げ、人々を遠ざけていることが分かる。

二点目についてだが、OG と LM の顔の表情に関しては何も述べられていない。しかし、“Little Annie's Ramble” では、すでに述べたように、OG は笑顔で演奏していたことは間違いない。たしかに、Annie の足がその方向へ動き始めたのはオルガンの調べが聞えたからであるが、OG が暗い表情をして、陽気な曲を奏でることはありえまいし、そもそも暗い表情の人物に子どもは喜んで近づこうとはしない。ただ、この場面における OG の笑顔はピエロ的なものであったと考えることが自然であろう。誰一人聴いてくれる人がいない中で演奏を続けなければならないのだから。LM も同様に笑顔だったに違いない。笑顔を作りながら演奏しているからこそ、LM の哀れさがいっそう伝わってくるのではないだろうか。

三点目についてだが、“Little Annie's Ramble” には、たとえほんの一時とはいえ、手廻しオルガンに合わせて「一緒に踊っている」Annie と、OG の「心情に気づいている」ナレーターがおり、“Der Leiermann” には、「僕の歌に合わせて手廻しオルガンをまわしてくださいますか」と語りかける主人公の若者がいる。彼等が示したもの、それは、慰めの行動やことばでもなければ、同情心でもない。「相通じるものを感じる想い」、すなわち「共感」（“sympathy”）である。

OG と LM を対比させることによって、異なる点と類似点が見えてきたのだが、LM の姿をさらに詳しく眺めると、OG の置かれている状況がいっそう鮮明に見えてくることに気づく。LM の前には皿があり、その皿は空っぽであることを見過ごしてはならない。確かに、OG の前に皿が置かれていたのか、いなかったのかについては、一切触れられていないし、皿があってもなくても、ナレーターは、OG が大衆に無視されていることを知ることができる。だが、皿がなければ、無視され続けてきたかどうかは分からない。分かるためには、「空っぽの皿」が必要なのである。空っぽの皿こそが、OG が大衆に無視され続けてきていることの証しだからである。

「OG の前には空っぽの皿が置かれている」ことに気づかせてくれるのは、LM なのである。

"Little Annie's Ramble" における OG と "Der Leiermann" に登場する LM を対比させることを通して、ナレーターが感じ取っていた OG の内にある「孤独感」「疎外感」がどれ程の深さであるのかを、私たち読者も感じ取ることができるのではないだろうか。

ところで、ホーソーンは、ナレーターを Müller の詩 'Der Leiermann' を読んだことのある人物、あるいは、*Die Winterreise* の終曲を耳にしたことのある人物として想定していたのだろうか。想定しながら、そのことには一切触れずに、"Little Annie's Ramble" に登場させていたのだろうか。もしそうだとすれば、ナレーターは、OG の姿の背後に、LM の姿を見ていたことになるだろう。

そもそも、Hawthorne は、'Der Leiermann' を読んだことがあったのだろうか、あるいは、"Der Leiermann" を聴いたことがあったのだろうか。そのことについて少し触れておく。

> "For young people or, rather, young men of means in antebellum American society, travel abroad—preferably a Grand Tour of England, France, Germany, and Italy lasting a year or more—was regarded as a necessary conclusion to a complete education. Historians George Ticknor and George Bancroft, artists Thomas Cole and Washington Allston, sculptors Horatio Greenough and Thomas Crawford, as well as such authors as Irving and Cooper all traceled and lived in Europe to round out their educations and satisfy their romantic yearnings for the past, especially the grandeurs of ancient Greece and Rome and the antiquities of the Middle Ages. (Larry Reynolds 10)

ここには Hawthorne の名前は出てこないが、彼より少し上の年代の作家 Washington Irving (1783-1859) や James Fenimore Cooper (1789-1851) の名前が挙がっている。当時の New England における若い作家、芸術家、歴史家などが、イギリス、フランス、そしてドイツの文学や芸術や歴史にいかに関心を持っていたかを窺い知ることができる。また、同世代の Oliver Wendell Holmes (1809-94) や Hawthorne の友人 Henry Wadsworth Longfellow (1807-82) は、Müller の詩を英語に訳している。ただ、'Der Leiermann' が1834年までに英語に訳されていたか否かについては、現在のところまだ把握できていない。また、Hawthorne が原詩あるいは英訳の詩を目にしたことがあるかどうかもいまだ把握できていない。とはいえ、19世紀の前半に、New England の文化人たちが、ドイツの文学、芸術、歴史、建築、思想などに興味をもっていたこと、また、サロンでの詩の朗読会やコンサートが盛んであったことなどを考えると、Hawthorne が *Die Winterreise* の終曲 'Der Leiermann' を知らなかったよりも、知っていた可能性のほうが高いといえるのではないだろうか。

おわりに

作品を読むという行為が、作品と読者の共同作業であるなら、私たち読者が OG の心の奥に潜む「孤独」、「疎外感」を LM のそれと同質のものと捉えることは許されるであろう。しかしながら、OG が登場する場面で、彼に少しも目を留めずに読み進めていくことは許されないであろう。なぜなら、その行為は、OG の心情に思いを馳せることなく、傍を通り過ぎていった大衆のそれと同じだからである。

注

1) Mary M. Van Tassel は、*ESQ: A Journal of the American Renaissance* 33.3 (1987):168-179. Print. に収められている論文 "Hawthorne, His Narrator, and His Readers in 'Little Annie's Ramble'" の最初の段落で、"Sunday at Home"、"A Rill from the Town-Pump"、"Sights from a Steeple"、そして、"Little Annie's Ramble" の 4 作品が「ホーソーンの時代に評価されていた」("respected in Hawthorne's day") と述べている。
2) たとえば、Hyatt H. Waggoner, ed. *Nathaniel Hawthorne: Selected Tales and Sketches*. 1950. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1970. Print.、Norman Holmes Pearson, ed. *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne*. 1937. New York: The Modern Library, 1965. Print.、あるいは、James McIntosh, ed. *Nathaniel Hawthorne's Tales*. New York: Norton, 1987. Print. といったよく知られたアンソロジーにも "Little Annie's Ramble" は入っていない。
3) 坪井清彦／西前　孝編『アメリカ作家とヨーロッパ』英宝社、1996。12頁の西前　孝訳、および、島田太郎、三宅卓雄、池田孝一訳『大理石の牧神Ⅱ』国書刊行会、

1984。146頁を参照した。

4) Nathaniel Hawthorne の作品からの引用文は、*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. 23 vols. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-97. Print. を用い、末尾に括弧を付し、その中に Centenary Edition の略である CE 、巻、および頁数を記している。

5) 國重純二訳『ナサニエル・ホーソーン短編全集Ⅰ』南雲堂、1994。273頁の「お茶目な」という訳は、Annie を形容するのにぴったりの訳なので、ここで用いた。

6) 松阪仁伺は、彼の著書『ホーソーン研究―神話と伝説と歴史』英宝社　2012。266頁の中で、*The Interpreter's Bible* を読み進めながら、「ホーソーンという作家がいかに聖書を深く読み込んでいたかを実感した次第である。」と記しているように、ホーソーンが聖書を詳細に読んでいたことは研究者の間では周知されている。

7) 聖書からの引用文は、『聖書　新改訳』日本聖書刊行会、1970。を用いた。

8) Müller の詩は、畑中良輔編『シューベルト冬の旅』中声用　全音楽譜出版社。から引用した。(出版年はこの楽譜には記載されていない。)

9) 畑中良輔編　『シューベルト冬の旅』中声用　全音楽譜出版社の志田　麓訳を用いた。なお、必要に応じて訳を変えている。

引用文献

Hawthorne, Nathaniel. *The Marble Faun* Vol. IV of The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1968. Print.

——. *Twice-Told Tales*. Vol. IX of The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1974. Print.

Miller, Edwin Haviland. *Salem Is My Dwelling Place: A Life of Nathaniel Hawthorne*. Iowa: U of Iowa P, 1991. Print.

Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. New York: Oxford UP, 1988. Print.

Reynolds, Larry J. *Historical Guide to Nathaniel Hawthorne*. New York: Oxford UP, 2001. Print.

Tassel, Mary M. Van. "Hawthorne, His Narrator, and His Readers in 'Little Annie's Ramble,'" *ESQ: A Journal of the American Renaissance* 33.3 (1987): 168-179. Print.

林　信行　『ホーソーン、メルヴィルとその周辺―文学のなかの人間像―』北星堂書店、1983。

國重純二訳　『ナサニエル・ホーソーン短編全集Ⅰ』南雲堂、1994。

日本聖書刊行会　『聖書　新改訳』1970。